

研修を通じて見えてきた異文化理解

文学部 2 年 D.E.

この度の研修は自分にとって初の海外進出であった。そのため見るもの全て新鮮で、全てに心をときめかせた。このため、2 週間の体験が全て学びであり、新しい経験の獲得であった。そのため、本レポートでは本研修中で痛感した 3 つのことを特に記述することにする。

まず、異文化と向き合う姿勢を学んだ。フランス人は予想以上に日本文化に関心を寄せているということがこの研修を通してわかった。もともと、フランスでは漫画やアニメを初めとした日本文化が大変人気であるということは小耳に挟んでいたが、全く予想以上のものであった。例えば、日本料理店がたくさんある。そこでは鰯や天ぷらといったものから、お好み焼き、唐揚げ、ラーメンなど多種多様な日本食が提供されていた。また、日本文化を扱った本も多く売られていた。驚いたことに、ストラスブール駅構内の売店には日本文化関連の雑誌のために一つ区間がもうけられており、漫画やアニメの情報誌を中心に 15 種はおかれていた。一概に漫画やアニメといっても、内容は最新の作品を紹介したものから、現在活躍している漫画家を紹介したもの、コスプレ事情をまとめたものなど多種多様であった。他にも、宿泊所近くにあった、日本でいうところのイオンにあたる施設の書店では、アジア関連の書籍が特集されており、そのほとんどが日本に関するものであった。内容は日本に関する食事、宗教、絵画、文学といった文化を特集した本や、村上春樹や上橋菜穂子といった人気作家の翻訳本まで幅広かった。さらには、暮らし、俳句、芸者など様々現地の日本語を学んでいる学生と飲みに行った際に見せて貰った日本語学科の授業プリントは、日本の漫画についての教科書と、日本の高校レベルの日本史の教科書であった。フランス人は決してアニメや漫画といったフィクションの中の日本のみを取り入れているのではなく、本や食などを通じて実際の日本の姿や精神を獲得しようとしているのだ。その上、言語を学ぶ際には、その国の歴史もしっかりと勉強しているのだ。異文化を学ぶ姿勢というのはこういうことかと学んだ。我々日本人がいかに異文化を学んでいないかを痛感した。たしかに、食事やアニメといった点ではフランスに引けを取らないほど異文化を享受しているだろう。例えば、街にはあらゆる国の料理があふれ、映画も他国の作品が頻繁に上映されている。しかしながらこれは文化の一表面に過ぎない。フランス人が日本に対して取っているような、普段の生活や伝統的な諸文化、歴史に対する関心は日本では低いだろう。一般に売られている海外について書かれた本といえば旅行の案内書が中心であり、生活や伝統文化そのものに目を向けたものは少ない。また、言語を学ぶ際にも、その国の歴史までは勉強しない。自分を省みてみても、フランスに行きたいとはいいいながら、本研修の事前講義と旅



行案内書で満足してしまっていた。これでは異文化理解をしっかりと出来ているとはいえない。とにかく日本の異文化に対する関心は、フランスの日本に対する姿勢と比べた時に、あまりに貧弱であると感じた。これでは確実に世界に対して視野狭窄な人間が育っただけだろう。

次に、コミュニケーションは言語運用能力だけではないということを学んだ。正直なところ、今でもフランス語はおろか英語の運用能力さえままならない。しかしながら、コミュニケーションは言語運用能力だけでは無いということがよく分かったのだ。例えば、現地の学生に向けて日本文化をプレゼンテーションした時、口で言ったこと以上の反応が得られた。プレゼン自体は現地講師の丁寧な指導もあり、原稿の訂正やリハーサルを事前に行った上で臨んだものではあったが、それにしても大いに成功した。我々の班は日本の伝統的な遊びという題目で発表を行い、自分はだるま落としの紹介を担当した。この時大変良い反応を受け取ることが出来たのだ。特にだるま落としを実演した際の反応が良かった。どうやら大げさな動きで実演したのが評判だったようである。また、現地の学生と飲みに行ったときも、言語外コミュニケーションが役に立った。というのも、現地の学生 3 人と日本の学生 3 人でテーブルを囲んで飲んでいただが、そこでちょっとした単語当てゲームを行うことになった。この時、出題に詰まってしまっても変顔をしてみたところ予想外に受けて場が和んだ。もちろん言語でコミュニケーションを取ることが第一であることに変わりはないだろうが、時に言語に頼らない身振り手振りも大切であるということがよく分かった。

最後に、2 週間くらいならなんとか海外で過ごせるということを学んだ。研修前はスーパーで買い物をするだけでも大変苦勞するだろうと思っていたが、実際はそれほど困らなかった。現代はスマートフォンもある上、買い物も自動販売機やセルフレジなどで人に接することなく行えてしまうからである。また、ストラスブールは街全体が観光地といった様子であり、大抵の店やレストランでは英語が通じた。そもそも日本人とみるやいなや現地の人が自ら英語に切り替えてくれることもあった。フランス語研修という見地に立てば、非常に残念なことではあったけれども、フランス語が出来なくても過ごせるのである。ただしこれは観光を主な目的においた場合の話で、いざ現地の人と会話をしたり専門的な解説を聞いたりするとなると話は別である。実際いくつかの場面で大変困った。例えば、家庭訪問の日は先方の言っていることを理解するのに必死であった。ペアで訪問したから良かったが、自分一人だけだったとすると場が繋がらなくて気まずい雰囲気になってしまったことだろう。また、博物館でガイドが作品の説明をしてくれたのだが、あまり理解できなかった。こういうことが起ってしまうため、言語運用能力が重要であることは言うまでも無い。しかしながら、家庭訪問にせよ博物館にせよ、これは研修のプログラムにあらかじめ組まれていた行事である。仮に 2 週間観光と称して街をふらつくだけであれば、これらのことを行う必要性はない。店の店員と定型的な会話が出来



スーパーのレジ(有人)

れば過ごすことは可能なのである。それではあまりに淋しいと思う人もいるかも知れない。だが言語を習得せずに海外に行っても良いといたいわけではない。必要以上に恐れることはないということを言いたいのである。研修前、海外は日本より怖いところであると、根拠のない恐怖を感じていたうえ、言葉が話せないとかなりつらいだろうと思っていた、しかしざ行ってみると、ストラスブールが恵まれているだけかも知れないが、怖いどころか素晴らしく過ごしやすいところであり、言葉が理解できなくて困ることには困るがなんとかなった。分からなければ分かるまで粘ればいいのである。

以上の 3 点からいえることは、言語運用能力が低いからといって必要以上に海外へ渡航することを恐れる必要はないということと、言葉が通じない場合でも、身振り手振りは予想以上に有効であるということ、しかしながら、異文化をきちんと理解したいのであれば言語の習得は不可避であるし、言語以外にもその土地の文化や歴史について勉強する必要があるということだ。つまり、異文化理解とは言語習得のみでなく、同時に文化や歴史も学ぶことである。しかしながら、現地に行ってみるのも異文化理解の一つの手段であり、言語の習得が不十分だからといって必要以上に渡航を恐れる必要は無く、実際に現地に行ってみることで、日本には見えてこないことが沢山見えてくるということをこの度の研修で学んだ。